

The Institute for World Literature 参加記

.....

リスボン 2015

(2015年6月22日～7月16日 於：リスボン大学)

山田美雪

2015年6月22日から7月16日、陽ざしの降り注ぐ初夏のリスボン大学にて、第5回 Institute for World Literature (以下 IWL) が開催された。IWL のサマースクールは、講義や発表、フィールドワークなど様々なプログラムを通して世界文学へのアプローチを試みるワークショップである。33 か国から集まった 157 人の 2015 年度の参加者は、文学を専攻する大学院生を中心に、既に教職に就かれている若手の研究者、また映画やジェンダー学等、文学に隣接する他分野の専門家まで多彩な顔ぶれが揃っていた。文学を通して世界について考えたいという共通の関心の下、メンバーの間には終始和やかで活発な雰囲気が溢れていた。

プログラムの中心は、会期の前半と後半に 2 週間ずつ開講されるセミナーである。各期間に、諸分野を代表する研究者による 6～8 つのセミナーが開かれ、参加者全員がいずれかに所属する。私は前半で、デイヴィッド・ダムロッシュ教授のセミナー「比較の根拠」を受講した。古今東西の複数の文芸作品を一つの地平に捉え、様々な批評理論を吟味・適用しながら比較の磁場の可能性を探るこの講義では、異なる時代や文化圏の作品の対置に留まらず、アダプテーションというジャンルの「越境」がもたらす化学反応までが広く視野に捉えられる。地域や分野を超えて作品を論じる支柱となる理論を集中的に学ぶと共に、複数の作品を読む「私」の立つべき地点について常に考えさせられた濃密な 2 週間であった。

一方、後半に受講したガリン・チハーノフ教授のセミナー「亡命と世界文学の創造」は、ナボコフ、イヨネスコ、クンデラ等、主にロシア・東欧の故国から他国への越境や亡命を経験した作家のテキストをもとに移動と文学創作について考察する、発表・討議主体の講義である。初回で「亡命経験においては、記憶、アイデンティティ、言語の間で絶えず三角測量が行われ、その状況は自国でも、どこにおいてもあり得る」と先生が定義された通り、議論は広義に“home”を離れることや、創造的場として意図的に言語的「亡命者」たろうとする表現者の試みにまで敷衍され、ロシア・東欧を起点にしながら世界の様々な文学が照射される刺激的な内容であった。個人的には、自分の研究テーマに係るアルゼンチンの亡命作家について深く考えたいと思いこのセミナーを受講させていただいたが、結果として、多言語で創作を行う作家や、紀行文学にも通ずる多くの示唆をいただいた。特に印象深かったのは、森鷗外の「高瀬舟」が取り上げられていたことである。生命倫理や封建社会における個人の意思決定といった観点からではなく、流浪の性質そのものに重きを置いて本作を読むのは、私にとってこれが初めての経験であった。この講義ではソルジェニーツインの『イワン・デニーソヴィチの一日』と「高瀬舟」を並置して読むことで、亡命状態の脱ロマン化、肯定的な捉え直しという共通項が浮上し、ダムロッシュ教授のセミナーにも通ずる、作品をどのようなコンテクストに置くかという問い、そして私自身が日本から距離を置くことで見えてくる作品の可能性について、

あらためて考察する機会となった。

何よりも IWL の醍醐味を感じたのは、様々なプログラムで得たことが関連し、響き合いを始めた瞬間だ。会期中には、セミナーの他に、講演やシンポジウム、参加者各自が現在の研究内容について発表し仲間から意見をj得る分科会、先生方のオフィスアワー、さらに開催地リスボン市内の博物館や資料館の見学、近隣の街へのミニツアーも盛り込まれ、講義で学んだことを自分の研究計画に直接反映させたり、多角的に考察したりする機会が絶えず提供されている。創作の言語としてのポルトガル語と、思考し、感じる言語としてのクレオール語が共存する自らの言語状況について語られたカーポベルデ出身のフィリント・エリシオ氏、難民や歴史の犠牲者に女性としての立場を重ね、記憶を掘り上げる場としての詩作について話されたアナ・ルイス・アマラル氏というポルトガル語圏の二詩人の講演には、チハーノフ教授のセミナーの内容を反芻した。皆でフェルナンド・ペソアの記念館を訪れた際には、各国語に翻訳されたペソアの詩を参加者が各々の言語で朗読するという、このイベントならではの楽しい即興企画もあった。

会期全体を通して、もう一つのプログラムと言えるほど自分にとって意義深かったものは、世界中から集った参加者たちとの対話であった。膨大な予習や発表の準備に一緒に取り組みながら、或いはセミナー後に一息つきながら、講義での議論の続きが行われることもあれば、互いの研究テーマや作家、研究生活についてまで、話が尽きることがなかった。参加者の見識の深さ、関心の幅広さに日々感銘と刺激を受けると同時に、自分と同じ地域や作家について研究する各国の友人たちとの出会いに、何度も励まされる思いがした。

先述のように、今回の参加者は 33 か国から集っていたが、それはあくまで現在各メンバーが所属する研究機関の所在地数にすぎず、多くの参加者はそこに至るまでに様々な形で越境を経験している。極めて多様なバックグラウンドを持つ人が集う IWL で、皆がどのような経緯で国境を越え、母国語と異なる言語を現在の自分のことばとして選んできたか、またその道のりでどのように作家や作品に出会い、どう読んできたかに耳を傾けることは、私自身の持つコンテクスト、研究テーマとあらためて向き合ううえでも非常に貴重な時間であった。ダムロッシュ教授は著書『世界文学とは何か』の中で、世界文学は「二重の屈折」であり「起点文化と受入文化が二つの焦点となって楕円の空間が生みだされ、そのなかで作品は、どちらか一方の文化に閉じこめられることなく、双方と結びつきながら、世界文学として生きる」¹と述べているが、移動を続ける一人一人の能動的読者の中でも作品が旅をし、屈折を帯び、プリズムを成していく様を、日々の参加者との対話の内に感じる事ができた。一人一人の世界と文学、言葉との出会いを共有するこうした対話こそは、世界文学研究という生成過程のディシプリンに向き合ううえで、一つのささやかな出発点になりうるのではないか。この一か月を終えてそう考えずにはいられなかった。ここで出会い、多くを教えていただいた全ての方に心から感謝すると共に、文化と言語の交錯の象徴ともいえる美しい港町で始まったこれらの対話が今後も継続していくことを、そしてさらに多くの方が IWL という旅を経験されることを願う。

注

1. デイヴィッド・ダムロッシュ（奥彩子、秋草俊一郎、桐山大介、小松真帆、平塚隼介、山辺弦訳）『世界文学とは何か』国書刊行会、2011 年、435 頁。